

生徒を深い思考に誘うため、ディベートに 合教科的視点を取り入れ、適切に評価する取り組み

三仙 真也

1. はじめに

新学習指導要領で教えることとなる、「論理・表現」。その中でディベートを指導すると明記されているが、「難しい」、「指導方法がわからない」といった声を聞く。指導方法に加えて、「評価はどうか」、「単発の活動にならないか」、そして「授業進度に影響はしないか」などの懸念もある。一方、たくさんの生徒がディベートを通じて学びを深め、通常の授業では到達できない領域まで能力を伸ばしてきたのを見てきた。

前述の懸念を払拭するためには、ディベートをカリキュラムの中に位置づけるとともに、指導方法や英語の授業における活動としての妥当性を教員間で共有することが重要である。教員が信念を持って指導を行い、ディベートは生徒の力を伸ばすために必要なものであること、飛躍的に表現力と思考力を向上させるものであることを生徒に伝えて日々の授業に臨むことが大切だ。また、後述する「合教科的視点」を取り入れ、評価については生徒が力量を「自己認識できる方法」に変え、同時に学年全体を動かす仕組みにすることで、生徒は大きく成長する。

2. ディベートを通じて得られる力

ディベート活動を通じて得られるものについて、アンケート形式で分析したことがある。対象者は勤務校にとどまらず福井県内の10校150名程度のディベート大会参加者であったが、実際にディベートを学んだ彼らからは、特に以下の点が「英語ディベートを通じて伸びた能力」の代表的なものとして挙げられた(カッコ内は全体を100として、「まったくその通り」「その通り」の占める割合)。

- ・複数の視点から問題を考える(77.2)
- ・自分の意見を効果的に述べて説明する(72.0)
- ・複雑な問題に対して、説得力ある意見を伝えることができる(71.0)

私が英語ディベートを通じて得られると考えている力とは、言語力はもちろん、いわゆる21世紀型能力とされる「人間関係形成力」や「問題解決力」、「メタ認知」「論理的・批判的思考力」である。加えて、「俯瞰的な視点でものごとを見る力」が挙げられる。自分の立場からの考えに固執することなく、対立軸を見出し、双方の論拠を比較しながら自分の立場がどの点で勝っているかを示す力とも言える。試合開始15分前に論題が発表される即興型のディベートにしる、事前に論題が発表されている準備型のディベートにしる、いかにこの対立軸を考えて比較し「バックワードに論をつくり出せるか」が重要になるだろう。

3. 実践の概要

本実践は予備校もない、補習も多く7限授業が日々展開されている、田舎の勤務校の3年間の実践だ。それでも生徒はディベートを通じて英語力を飛躍的に伸ばし、学力がそれに比例し、顕著な成果を挙げた。

まず1年生で集中的に「論理展開」「構造」ベースでディベート(準備型)を学習し、2年生になって「流暢さ」を求めて即興型を取り入れ、3年生で「コミュニケーション英語」の教科書に書かれた内容をベースに、ディスカッション等とともにディベートを取り入れた。

昨年度卒業した生徒たちを対象とした実践であるが、英語の能力の伸長はもちろんのこと、資格・検定試験のスコアも、模擬試験の成績も、そして大学入学試験の合格実績も、ここ30年間で随一の結果となった(入学当初は平均的な学年と言われていた)。

4. ディベートの実践と工夫

それでは、実際にどのようにディベートを導入したか。前述の通り、英語ディベートは「論理・表

現」での学習が主であるように思われるが、私はあえて「英語コミュニケーション」での学習を推したい。「論理・表現」で形式を学び、「英語コミュニケーション」で扱う題材を活かしながら、考えを深めるということだ。またその際、以下のように工夫するとよいと考えている。それぞれについて順を追ってまとめたい。

- 1) シラバスにディベートを位置づける
- 2) 題材を活かし、論題の設定を工夫する
- 3) 合教科的視点を取り入れる
- 4) エビデンスを英文で公式配布する
- 5) 学年全体が関わる活動にする
- 6) 評価は定期考査に加えて、ライティングで行う
- 7) ルーブリックをエッセイシート等に明示する

1) シラバスにディベートを位置づける

持続的にディベートを実施するために重要なのは、ディベートを学ぶうえでの「必要性を持たせること」の1点に尽きる。教員側にはシラバスに明示し、かつ体系的な指導をするために指導方法の検討と研修を行う。生徒側には授業内でのディスカッションに至るまでの過程で、教科書を理解し新たな着想を得るために、ディベートが有効であることに気づかせることが重要である。教員側も実際に体験するなどして、ディベートの効果を実感し、生徒側に粘り強く取り組むよう促すことが肝要だ。

「(ディベートが最終目的地ではなく、)最終的にどのような問いに対して学びを深め、どんな力を得ることを目的としているか」の見通しを「学習者(生徒)」が持てることも重要である。このことを念頭に置いて本実践では生徒が入学する段階で、ディベートを3年間のいつ、どこで行い、どんな能力を習得させたいかを明示した **Can-Do Statements** を作成し、生徒に配布した。こうすることで生徒は見通しを持って能動的に取り組むことができる。

このようにして1年次からディベートを導入した生徒が3年生になったとき、「コミュニケーション英語」の授業中に、「この問いを深く考えたいのでディベートをしたいのですが、いいですか?」という発言が出た。その際は授業を即中断し、即典型ディベートを行ったのを昨日のように覚えている。

今後「論理・表現」においても、英語での指導は

もとより、英語でスピーチやディスカッション、ディベートをすることが求められる。教員もそれらを指導できること、カリキュラムの中に位置づけ、効果的に、かつ獲得させたい力を明示し生徒に理解させながら、活動を通じて「確かな学び」を経験させていくことが必要である。

2) 題材を活かし、論題の設定を工夫する

「論理・表現」の科目内ではばかりディベートを実施するのではなく、読み物が示唆に富んでいる「英語コミュニケーション」の授業内でこそ、ディベートを実施すべきであると先に述べた。ディベートでより論理的な意見を述べるために、教科書を共通の **reference** として設定できるからだ。教科書の記載内容をディベートの論拠とし、例えば **According to the textbook ...** のようなフレーズも使用可とすることをあらかじめ伝えておき、論題を教科書の学習開始前に伝えておけば、よりいっそう教科書の内容理解でとどまることのない、常に意見・考えを生み出そうとする能動的学習が各学習者によって自律的に行われる。

また、ディベートを実施するレッスンは、すべてでなくともよいと考えている。私が実際にディベート活動を取り入れた「コミュニケーション英語」の教科書のレッスンと論題は以下の通りである。

- ・地雷除去とロボット工学(CROWN；三省堂)
「ロボットの使用は地雷除去運動に取り組む人々に恩恵を与えるか」
- ・国境なき医師団(CROWN；三省堂)
「逼迫した医療現場において酸素ボンベを切るという医療行為の是非」
- ・兄の夢のために自己犠牲をする弟(ELEMENT；啓林館)
「人のために犠牲になることは本当に正しいのか」

単にディベートをする、ということだけに主眼を置くのではなく、「自己関与度」の高い題材にできるよう、身近な人との関係において論題を考察させたり、教科書外からも関連する題材を紹介して、常に新たな視点が得られるよう題材の配置をよく検討したりする必要がある(そのような新たな題材を扱う際には、英文であることが望ましいが、題材に関する理

解を深めることが重要であるため、日本語の題材を使用することも問題はないと考えている)。例えば3つめの題材は小学校の道徳の教科書に日本語版が載っていることから(「いのりの手」)、それをういた。

一方、ディベートを行うことで理解が深まるレッスンもあれば、ディスカッションやその他の活動が有効な場合もあるだろう。そもそも他者のいろいろな考えを踏まえて肯定・否定のどちらかの考えを選ぶ場合もあれば、ケースバイケースで考えが変わったり、どちらの立場とも異なる新たな視点が得られたりすることもある。現実世界を考えたとき、ディベートのようにはっきりと対立した「どちらか」を選び「もう一方」を否定するような事象は少ないだろう。むしろ、ニュートラルなものの考え方や、この部分ではこちら、あの部分では…といったように、様々なものの考え方を踏まえてケースバイケースで主張することも、多いのではないか。そこで、ディベート活動を通じて「二項対立」で深まった考えについて、続けてディスカッションをさせることもある。現実世界においてよくある、多項対立でニュートラルな視点を許容したり、一方の意見を比較・検討したりする中で自分の意見により説得力を持たせたりすることを目指すためだ。そのような学びを学習者に提供するために、題材の選定や論題の設定には注意が必要だ。

3)合教科的視点を取り入れる

「日本は社会保障制度を廃止すべきである(In Japan, we should abolish the social security system.)」という論題を聞くと、どのように思われるだろうか。高校生に話せる論題ではない、と思われるかもしれない。本実践では1年生にこの論題を提示し、2度にわたって学年集会を行った。1回目はディベートレクチャーと模擬ディベート、2回目はクラス対抗マッチの決勝戦の参観とアフターディベートレクチャー(公民科教員によるフォローアップと筆者のコラボ説明)である。

この論題であるが、1年生の3学期に扱ったものであった。その着想は教科書ではなく、現代社会の授業で「社会保障制度の仕組み」を学習することに端を発した。公民科教員と英語科の話し合いの中で、社会保障制度のあり方や、どのような人々が実際にその恩恵を受け、また制度そのものにどんなメリッ

ト・デメリットが伴うかを考えさせたいという声が上がった。現代社会の授業で知識を得、英語の授業でアウトプットするという循環を生むことができた。

4)エビデンスを英文で公式配布する

英語の学習の一環であることに鑑み、論題に対するエビデンスを探す時間は最小限にとどめておきたい。インターネットによる証拠検索をそもそも禁じてもよいだろうが、先述の社会保障制度に関するディベートでは生徒に有効な波及効果をもたらすために、校内に常勤しているALTに依頼し、世界各国の社会保障制度に関する情報を英文で集めてもらい、肯定側・否定側の双方にバランスのとれた内容で、平易かつ教科書よりもあえて少しレベルの高い英文になるよう、リライトをしてもらった。英文の新たなリソースを与え、オフィシャルエビデンスとして使用を許可し、生徒がパソコンの前で社会保障に関する文献を読み漁る時間は最小限にとどめられるように工夫した。

結果的には、ディベートをする際の共通エビデンスとして扱われることから、生徒は自分たちの議論にどう活かすか、相手が論拠としたときにどのように反論できるかを考えながら、食い入るように読み進めていた。現代社会の授業への興味関心が増したのももちろん、公民科教論に熱心に質問を求める姿が多くの子供から見られた。

5)学年全体が関わる活動にする

前述の通り社会保障制度のディベートでは最終的には学年集会の形をとった。クラス対抗でディベートを行った後、決勝ラウンドにて集会の形をとり、単なるオーディエンスではなく、生徒たちもジャッジの一員としてディベートに参加し、優勝チームを決定した。まるで球技大会の決勝のように、学年全体で英語ディベートに取り組むことが意識の高揚につながった。事後アンケートでも意識が高まったと回答する者が多くいた。

ディベートそのものは、否定側が主張する「生活に困窮する弱者を救済できない」とする立場に、肯定側の「真の自由競争により経済が活性化する」といった長期的なビジョンで日本社会全体を好循環にしていく必要性を主張する立場がぶつかり、非常に有意義な活動となった。

なお、学年集会の翌週からはディベートの特性ともいえる、「逆の立場に立って考えることの容易さ」を活かし、肯定側だった生徒は否定側に、否定側だった生徒は肯定側に変更し、同様にクラス内での立論作成からディベートまでを実践した。メリット・デメリット双方を学ぶことができるディベートの長を最大限活かし、学びを深めることができた。

6) 評価は定期考査に加えて、ライティングで行う

最終的な評価は、ディベートをしているときにジャッジとともに行うパフォーマンステストと、定期考査でのエッセイライティングで行う。パフォーマンステストでは、役割によって評価項目などの記載事項を変えて提示する。生徒が自分の役割に応じて評価規準を確認し、自分の果たす役割を明確にできるよう、事前に配布するなどの工夫ができる。定期考査でのエッセイライティングでは、ディベートで扱った論題について自分の意見を書かせる。例えば先述のディベートでは、「社会保障制度は撤廃すべきである、是か非か」という題のエッセイライティングを出題した。また、エッセイライティングの他に、立論をリスニングしてフローシートの空所を埋めたり、反駁をライティングさせたりする問いも出題した。加えてディベートのイントロ授業で学習していた「説得力ある argument = idea + reasoning」という観点から、Fact / Opinion 型の判別をする問題を出题している。

7) ルーブリックをエッセイシート等に明示する

エッセイライティングのルーブリックについては「エッセイシートにあらかじめ記載しておく」、エッセイの記入欄については「ポートフォリオのように、教科書を学ぶ前後で比較できるよう、大きな紙(例えば A3)に左右両方に印刷しておく、記入する際はもう一方を隠す」ようにするとよいと考える。論題を与えられてすぐに書き出したエッセイと、レッスン(ディベート終了)後に書いたエッセイを自分で比較することは、非常に有益な活動である。2つのエッセイを左右で比較することで、自分の知識の伸長と理解の深まりを把握できるからだ。評価規準を事前に明示し、かつ「ディベートを通じて得られたスキルや視点」をエッセイライティングに取り入れているかを評価対象にすることも重要な点である。

5. 段階を追った指導の重要性

ここまで、ディベートを導入する際に工夫した点をまとめた。ここで、授業でディベートを扱うコツとして、段階を追った指導について述べたい。

さあすぐに試合、ではなくテーマを与えてマッピングしたり、状況によっては日本語で隣の生徒と確認したりした後でペアでのスピーチを実践し、時間を徐々に伸ばす(例: 1分→1分15秒→1分30秒)、最後はメモを見ない、AREAの法則(Assertion / Reasoning / Evidence / Assertionの順で話す)を使う、ワードカウンターを用いて生徒の自身の伸びに対する肯定感を高めるなどの工夫を行うとよい。スピーチ後にQ&Aをさせたり、スピーチ中にディベートのPoint of Information(即興での質問や反論)をしたりするなどの工夫を行うことで、どんな学力層の生徒にも対応できると考えている。

6. オンラインディベートの活用

今般の新型コロナ禍のような未曾有の状況においては、オンラインでディベートを行うのもよいだろう。Zoomやその他遠隔システムだけでなく、オンラインディベート用のプラットフォームがいくつかある。例えば、Mixidea (<https://mixidea.org>)はディベート用のサイトで、TwitterやFacebook、メールアドレスの登録で使用できる。休校となっても、オンラインで授業を受けることができる環境であれば各家庭からディベートに参加することができる。対面での授業の場合も、あえてCAI教室に行ってMixideaでディベートをしてもよいだろう。スピーチの録音ができたり、自動でスピーチ時間を計測してくれたりと使い勝手はよい。オンラインのメリットは感染防止だけでなく、質問や発言のしやすさがある。グループワークなどが禁止されていたり、複数人での対面の活動に抵抗のある生徒や保護者がいたりする場合にはうってつけのサイトである。録音した自分のスピーチを後で聞くこともでき、自己の振り返りを効果的に行うことができる。

「論理・表現」の授業における効果的なディベート実践に向け、本稿が助けとなれば幸甚である。

(福井県立藤島高等学校 教諭)